



魅力あるまちと観光を目指して

十代田 朗 研究室～情報環境学専攻



十代田 朗 准教授

都市や地域は少なからず観光地としての側面を持っている。また、人間活動においても日常と違う旅は、私たちに潤いや明日への活力を与える重要な時間だ。このように、社会が空間と人間活動によって構成されると考えたとき、社会を研究する上で観光は重要な切り口となる。

十代田研究室ではこのような観点から、観光とまちづくりについて研究を行っている。そこで、初めにまちづくりを取り巻く環境の変化を、次に実際の観光とまちづくりの取り組みを、最後に観光に関する歴史的研究について紹介しよう。



観光の変化とまちの課題

近年、価値観の多様化に伴い観光の形態が変化している。富士山や法隆寺などの観光名所を巡ったり、温泉地でゆっくりしたりするだけでなく、農村に行って農業体験をしたり、下町や秋葉原などを歩いて楽しんだりといったことでも観光として成り立つようになってきた。これは今まで見落とされていたものが観光資源として注目されるようになったからだ。観光客は日常からかけ離れた体験、すなわち非日常だけではなく、地域住民と交流し自分の日常とは異なる日常、いわば異日常

を楽しむようになったのである(図1)。

この変化に伴い、これまで観光地として捉えられていなかったさまざまな地域が観光地として注目されるようになった。例えば、富士宮では最近富士宮焼きそばがB級グルメとして有名になり、地元のまちが活性化し、まちおこしとして成功している。

一方で、新しい観光スタイルでは住民の日常が観光の対象となるので、住民のプライバシーの問題など観光客と住民との間で問題が起きている。

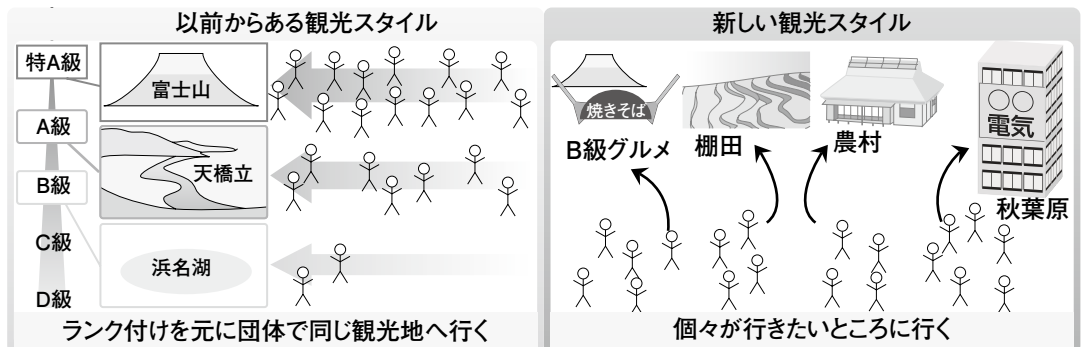


図1 観光スタイルの変化

実際に東京の谷中という所では、下町の町並みを見に来る人が住民の生活空間まで入り、写真を撮っていくなど問題が生じている。

まちが観光地としての側面を持つようになった今、この変化にどのように対応するべきか、どのようにして観光をまちの産業に組み込むべきか、などについて考えていくことが現在のまちの課題といえるだろう。この時、観光の対象は住民の日常でもあるので、行政が行う「都市計画」だけではなく、住民が主体となった「まちづくり」を行うことが必要となってくる。



別府での観光とまちづくりの取り組み

十代田研究室が観光地のまちづくりを手助けしている例として、別府での取り組みを紹介する。

もともと別府は湯治場として発展していた。湯治場というのは、治療の一環として長期滞在をする温泉地のことである。当時は、宿泊する旅館と温泉がある公衆浴場は別々の施設であったため、その間を行き来する必要があった。また、別府を訪れる人は商店で食材を購入して自炊したり、夜は歓楽街に足を運んでいたりしていたので、人々の交流が盛んで、経済的にも別府は活気にあふれていた。

しかし、高度経済成長期に入ると、宴会のために訪れる団体旅行客が増え、そのニーズに応える形で別府の温泉旅館は大型化した。旅館内部には大宴会場、食事処や遊ぶ場所までであるので、観光客は旅館の外に出る必要がなくなった。そのため、観光客は旅館の外部で消費することがほとんどなくなってしまった。観光客のニーズに応えたことが、結果としてまちの衰退を招いたのだ。

さらに近年の観光客のニーズの変化により、団体旅行客や宴会向けの温泉地は人気落ちてしまった。観光産業を主体に経済が成り立っている別府は、まち自体が経済的危機に陥ってしまったのである。そのため、別府では観光地としての再構築を必要としていた。

そこで、旅館経営者で構成される組織は十代田研究室に別府市街地南部についてまちづくりと新しい形の観光の提案、そして観光資源の評価を求めた。彼らは小さい頃からそこに住んでいるので、客観的に観光資源を評価することが難しい。彼ら

十代田研究室では、観光地として魅力的でありつつ、住民にとっても住みよいまちを計画することを目標に、観光とまちづくりに関してさまざまな観点から研究をしている。また、専門家として地域の計画に客観的な意見を述べて、まちづくりの手助けも行っている。そのとき、まちづくりは住民の意思と責任によって行なわれるべきと先生は考えているため、研究室としては一定の距離を置くようにしているという。

次の章では、実際の取り組みを例に、その手法や十代田先生の考えを具体的に紹介しよう。

は価値があると思っても観光客は面白いと思わない場合や、逆に彼らは当たり前と思っていることに観光的な価値がある場合もある。つまり、外部の客観的な意見を必要としたのだ。

研究室はまず、別府市南部の基礎調査を行い、三つの問題点を挙げ、その対策を提案した。

一つ目は、商店の廃業や空地化が進んでいるという構造の問題だ。空地化によって商店全体のやる気が低下し、集客力の低下につながり、それがさらなる空地化を招いているという悪循環がおきていたのだ。この問題を解決するために、研究室は散策ルートの整備やイベント開催などを提案した。このことにより、人通りが増え、リピーターが増え、商店のやる気も向上すると考えられる。今後もまた、段階的に旅館経営者が商店のサポートを考えていくことが、まちの活性化のためには必要だ。

二つ目は、景観の問題だ。せっかくのレトロな雰囲気建物や町並みが、スケール感や色のトーンの異なる建物によって沈んでしまっていることと、空地や駐車場、むき出しの家の裏壁などで、家並みの連続性が途切れてしまうことを研究室は問題として挙げた。対策として、町並みを維持するため、新しい建物を既存の町並みに最低限なじませていく景観の指針の必要性を提言した。

三つ目は、南部地域が各メディアで取り上げられることが少なく、あまり認知されていないという情報の問題だ。対策として、研究室は南部に拠点施設の創設、アピールするための情報発信が必要だと提案した。

次に、研究室は別府市街地南部の観光資源の価値を整理した。まず学生と実際に地域を歩き、観光資源を評価して表を作成した。フィールドワークで住民に説明してもらうことで初めて分かるものもある。その後、それらの観光資源を地図に落とし込んだ(図2)。問題点や、観光資源を地図上にビジュアル化することで、住民がこれまで知ってはいたのだが意識してこなかった観光資源を認識し、まちとして観光への意識が高まる。これらは観光振興のためのアイデアを出す準備ではあるが、大切な過程だと先生は言う。また、住民はそれらの観光資源を単体で見せる努力はしてきたが、複数を組み合わせることをあまりしてこなかった。そこで、四つの拠点施設の整備(温泉施設、情報交流施設、イベントスペース、バスターミナル)と、それぞれの名所をまわる観光ルートを提案した。

これらの成果は、シンポジウムで発表し、新しく設けられた情報発信のための拠点施設に大きなパネルにして置いた。住民に見てもらうことで、まちづくりの意識が高まると期待される。これらの結果はすぐには出ないが、積み重ねることでもちづくりが良い方向に進んで行くと考えられる。



図2 観光資源のビジュアル化



未来を予測するための歴史的研究

また、先生は歴史的研究にも力を入れている。社会という複雑なものを対象にするので実験することが難しい。そこで歴史という社会の変動の結果を分析することは、未来への予測に対して有効だと考えられる。例えば、政府の観光政策を分析した例が挙げられる。政府は2008年10月1日に観光庁を設立し、本格的に観光立国のために動き出した。政府が観光に力を入れているのは歴史的に見ると今回が三回目、一回目は昭和初期であった。そこで十代田研究室では当時の政府が海外の旅行者に対して発行していた『ツーリスト』という雑誌を分析し、日本が海外に何をアピールしていたのか、海外の人は日本をどのように捉えていたかなどを研究した。これは現在の観光立国

のためのキャンペーンに一つの知見を示すことができるだろう。

以下では、十代田研究室で行われた高山と倉敷の研究を例に歴史的研究の具体的な手法について紹介する。十代田研究室はこれらの地域では町並み観光がどのように発展してきたのか、住民は町並み保全や観光地化にどのような意見を持っていたのか、その意見がどのように変化してきたのか、について調査した。そして観光地としての発展過程と住民意見の変遷との関係について研究した。

まず、高山の観光の発展について、統計資料と文献で観光客数の増減とその要因を整理し、時代を6個に区分した。そして、時代区分ごとに、観光・まちづくりの特徴をまとめた(図3)。

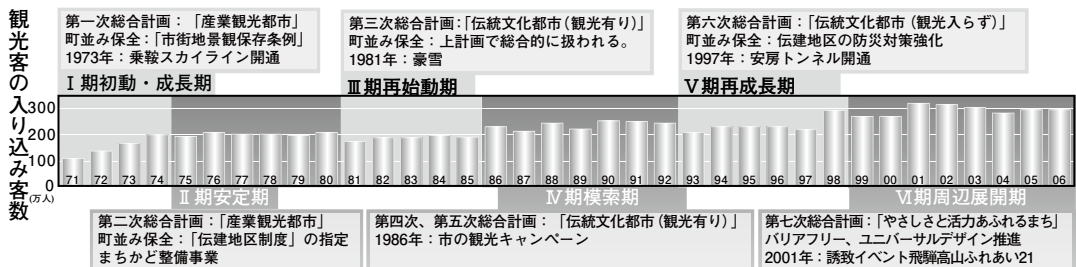


図3 高山における観光客の入り込み人数の変化と各時代の主な出来事

町並み保存について			観光地化について		
	賛成意見	反対意見	賛成意見	反対意見	
I 期初動・成長期	2 看板が景観を台無しにしている	1 市は保存にやっきになっている	0 -	8 観光中心の地場産業育成からの脱却を	
II 期安定期	4 電柱が傾いて危険、景観の面からも撤去を	0 -	3 今、観光を取ると市民共済はどうなるか	7 観光客数減を望んでいる	
III 期再始動期	4 電柱がせっかくの景観に水を差している	0 -	2 ここで観光客減少に歯止めをかけ盛り返そう	0 -	
IV 期模索期	1 自販機、招き猫等で情緒ある町並みが台無し	0 -	7 大きな産業が無い高山は観光に依存する	3 スーパー、飲料の看板が多くなりつつある	
V 期再成長期	1 降屋前の電線地中化を要望	0 -	4 飛騨の里の人気凋落は深刻	4 観光偏重の見直しを	
VI 期周辺展開期	5 周囲の景観にあった看板を立てて	0 -	3 観光客の大幅増に反比例し線消費税額が減少	1 市民が求めているのは自然環境保全	

図4 住民の観光に関する意見の変化

次に、『高山市民時報』（1970～2003）を用いて、観光・まちづくりに関する意見が読み取れる記事を抽出した。記事の論点を10に整理した結果、250記事、402意見が得られた。それぞれ賛成・反対の論調に分け、毎年に票数と意見を集計した。上図は特に町並み保全と観光地化に関する部分を抜き出したものだ（図4）。

倉敷も同様にデータを集め、観光の発展過程と住民の意見の関係を分析した。

まず町並み保全に関する意見は、両地域とも観光客の増減に関わらず、住民、事業者、行政すべてが概ね賛成意見だった。また観光客増加期には、土産物品店の増加や、のぼり旗・看板の氾濫に伴う景観悪化に対して住民の懸念があったことも分かった。さらに観光客減少・停滞期には、事業者から建設計画に対する規制への不満や、町並み保存地区住民から住宅の住みにくさに対して不満が出ることも両地域に共通していた。

次に観光振興についての意見は、観光地化・俗化に対する懸念は観光客の増減に関わらず現れている。高山の初期に住民の間で市政の観光偏重への懸念が見られるが、中期には「観光に依存する

しかない」ことが住民、行政の共通認識になる。だが、後期には再び市政の観光偏重への傾向が懸念されている。倉敷も、初期に市政の観光偏重を懸念する事業者があるが、中期には「市も市民も産業としての認識が不足していた」と観光偏重の姿勢が見られ、後期には再び市政の観光偏重を懸念する意見が住民と事業者に現れる。

以上から、観光客数の増減を繰り返しながら両地域は徐々に観光への依存を高めていった。だが、近年は市政の観光偏重に対して懸念がみられ、観光振興は新たな局面を迎えている、と研究室は分析した（図5）。

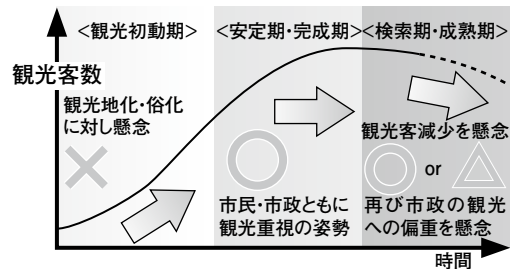


図5 観光振興の今までとこれから



十代田研究室とこれから

観光が十代田研究室のキーワードだ。だが、学生には初めから観光というテーマには入らせず、社会問題、まちづくりといったテーマから入り、その後観光に関連させるようにしている。それは、社会の中での観光という位置づけを常に意識することが大切だと先生が考えているからだ。

また、十代田研究室は留学生や文系からの出身者等さまざまな学生を受け入れている。多様な考

え方やアプローチの仕方を見ることで、学生が相対的に自分について理解を深め、研究を進められるのだ。そして、先生は研究に対して文系理系といったを区別せず、社会の問題を解決するために最良の方法をとることが大事だと考えている。

今後、社会が成熟していく中で、観光の持つ意味はますます重要になるだろう。観光とまちづくりに取り組んでいる十代田研究室に期待したい。

今回の取材で伺った観光の話は大変興味深いものでした。最後になりましたが、度重なる取材を

快く応じてくださった十代田先生に厚く御礼申し上げます。（山中 康寛）